2020年 8月 9日発行

みらい すくすく 通信 461号

この通信に掲載の野菜のお届け日

2020年 8月24日～8月28日

いつも有機野菜をお買い上げありがとうございます。
毎週、旬の情報をお伝えします。

有機農産のお届け便 ゆうきの実

新規就農物語

②安平、RooT Farm（ルートファーム）＜前編＞ ～ポスト資本主義時代の遺伝子たち

◀やるなら有機野菜ということに迷いはなかったそう

ミレニアル世代。インターネットとともに育ち多様性が培われ、好景気の経験がなくモノよりコト、所有よりもシェアを重視。2000 年に成人を迎えた世代は、その千年紀という意味からこう呼ばれ始め、彼らも今や４０代。就農研修の受入をする安平、無何有の郷（むかうのさと）農園、小路組合長のもとへ、2011 年、2014 年、2017 年と訪れ、新規就農を果たした３人もその世代の走り。確かにこれまでの就農事情とは毛色が異なるよう。それぞれの野菜へのこだわりと合わせてシリーズで紹介します。

2013年に独立したハラハチファーム中村さんの翌年に研修入りしたのが新戸部久典さん。旭川で出生後、親が転勤族ということで道内を転々と過ごし、札幌で就職。奇しくも自分も転勤族となり仙台、神奈川と移り住みました。結婚して子どもができ、野菜が育つところを子どもに見せたいと家庭菜園をスタートしたところみるみる惹きこまれ、その後関東で確立されており、農家のお手伝いをする「援農」というシステムに迷わず参加。援農先の有機農家から農業について一から学びます。仕事や会社には特に不満があったというわけではありません。それでも就農へと舵を切りました。新戸部さんを有機農家へと向かわせたもの、それは、

「好きだから」

「見えないものを形にしていくということに、とても惹かれました。」家庭菜園の頃から、有機肥料に微生物等を加え発酵させるぼかし肥料を手作りし、発酵作業で美味しい野菜ができるという発見に、いろんな個性を活かしながら成果につなげていくまるで実社会のようだと、とても面白みを感じたそうです。神奈川時代は職場が東京で、電車往復４時間の通勤生活でしたが、その時間を利用して、農業技術検定や土壌医検定といった資格を取得する程ののめり込みよう。今でも土づくりは帆立の貝殻といった有機物に納豆菌や乳酸菌を加え、いろいろな生き物を排除せず活かすことが基本方針。アブラムシを食べるテントウムシを放ち、雑草も収穫の邪魔にならなければと、さほど気にしません。

神奈川での援農先では、消費者が有機農家を食べ支える「提携」という仕組みがあり、この関係づくりが素晴らしいと感じていたところ、似たような仕組みであるゆうきの実を知ったことも、北海道での就農動機になりました。

念願の就農、楽しいことだらけでは？と訊くと「研修 1 年目はとんでもなくきつかったです（笑）。重い根菜の手作業、そして北海道の広大さを思い知らされました（それまでは神奈川だったので）。」

独立後は２町程度（≒140m四方）の圃場での多品目栽培を目指し、すぐに始められるようにと研修２年目にしてトラクター、ハウスを購入。ところが畑を探し始めると、空いている候補は予定よりずっと広いなんと 7.5 町（≒270m四方）。しかも粘土質の土地のため品目が限られます。

▼看板野菜にしたいのはピーマン。性にあっていると

▼ 農場内にはさまざまな生態系が

▼ とっくり芋。珍しい野菜にも挑戦中

「土地代はもちろん、機械費用も増える。やっていけるのだろうか…。」（つづく）